岡山県立大学保健福祉学部紀要　第27巻１号2020年　41 ～ 48頁　http://doi.org/10.15009/00002362

退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス

小薮智子*　原瀬愛理**　井上かおり***　上野瑞子****
松田美鈴****　竹田恵子****　名越恵美***　實金栄***

要旨　本研究の目的は自宅へ退院した高齢者のストレングスを質的に明らかにすることである。退院支援看護師15名に、患者が自身のストレングスを発揮し、自宅へ退院した高齢者の事例を尋ねた。逐語録から高齢者のストレングスの内容を示している記述を抽出、コード化し、内容の類似性に基づきサブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリーを抽出した。自宅へ退院した高齢者のストレングスとして【志向】【自信】【靭性】【能力】【環境・資源】が明らかになった。自宅へ退院する高齢者のストレングスの特徴として、現状維持や制約の少ない生活といった希望が原動力になっていること、堅固性と柔軟性の両方を合わせもつこと、これまでの自身の生き方により培った人的資源をもつことが考えられた。退院支援の際には、これらの高齢者のストレングスに焦点を当てた情報収集、アセスメントを行い、高齢者がストレングスを発揮できる支援を考える必要がある。

キーワード：高齢者、自宅退院、ストレングス、退院支援

Ⅰ．緒言

急速な高齢化により、我が国の人口構造は大きく変化している。2065年には高齢化率が38.4％に達すると推計されており[1)]、今後医療や介護を必要とする高齢者はますます増加する。わが国の経済成長の鈍化と人口動態の変化、医療費をはじめとする社会保障費の急増が見込まれる中で、財政は危機的状況にあり、保健医療制度の持続可能性が懸念されている。限られた医療・介護資源を有効に活用し、必要なサービスを確保していくことは、我が国において喫緊の課題である。

このような状況にあって、地域包括ケア研究会[2)]は、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援のために「互助」「公助」だけでなく「自助」「共助」を活用することの重要性を示している。この「自助」に着目するならば、個人がもつ内的な力がその自助を支えるものと考えられる。近年、精神障害者支援を発端に個人がもつ内的な力のひとつとして、ストレングスがとりあげられている。ストレングスを専門職者がケアに導入し始めたのは、1970年代後半のアメリカで、精神障害者のケアマネジメントに活用されたのが始まりといわれている[3)]。対象者のウィークネスといえる問題状況の解決を図ろうとする医学モデルのアプローチから、対象者のもっている能力や意欲、好み、抱負といった強さ、社会資源や人間関係等に視点を当ててアセスメントし、生活全体を支援し、対象者を成長・発達させていくストレングスモデルへの転換がすすめられた。ストレングスモデルの効果を測定した研究では、対象者のケアマネジメントへの満足度が高く、ストレスに対して強くなり、地域での生活力を身に着けていることが明らかになった[3)]。

しかしながら、高齢者支援においては高齢者自身がもつストレングスをみいだし、発揮することを支援するかかわりが十分できていない現状がある[4)]。高齢者が豊かな人生経験に基づくストレングスを持っていることは明らかである[5)]。

Fast と Chapin[6)] は、ストレングスモデルを高齢者に活用することの有用性を説明している。ストレングスモデルでは対象者の「問題点」よりもむし

* 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科保健福祉科学専攻
** 岡山県立大学大学院保健福祉学研究科看護学専攻
*** 岡山県立大学保健福祉学部看護学科
**** 川崎医療福祉大学保健看護学部保健看護学科

ろ「強み」に焦点を当てる。高齢者は多様な経験、能力、個性、役割といったストレングスを持っている。したがって、ストレングスに焦点を当てることにより、高齢者の潜在的能力は引き出され、内的・環境的資源が明確になる。この引き出され、明確になった内的・環境的資源を活用することは、高齢者が自ら選択し、問題を解決することとなり、自分自身で生活をコントロールしているという実感にもつながる。このようにストレングスモデルに基づくアプローチは、高齢者の自立や満足感につながり、生活の質の改善がもたらされる。

Rapp[7] は、ストレングスモデルの主眼となる望まれる成果は、自分自身で設定した目標を達成することである、と述べている。自身で目標を設定すること、状況によっては方向を変換し、折り合いを付けるという過程には、意思決定が伴う。つまりストレングスは高齢者の意思決定に関係しており、自身の納得する人生を主体的に、自分らしく生ききることを支えている。

地域包括ケアシステムの「植木鉢モデル」においても、高齢者が自らの意思に基づいた生き方ができるよう「本人の選択と本人・家族の心構え」として自己決定を尊重する体制整備が求められており[8]、ストレングに着目したアプローチは重要である。

高齢者のストレングスが最も発揮される場面に、退院の場面があると考える。ケアサイクルにある高齢者は、急性増悪エピソードが生じると、通常病院で急性期治療を受け、急性期治療が終了すると、地域で長期ケアの段階に入る[9]。この地域での長期ケアに移行する段階では、入院前に比べ ADL が低下していることや、新たな自己管理が必要となることも多い。退院の場面は、高齢者のその後の人生にかかわる場面であり、在宅か施設かの選択や、サービスの程度に関する意思決定が求められる。高齢者は、自身の今後の人生を考え、自分の目指す生活の実現に向けて、自身のもつストレングスを発揮する必要がある。

一方、我が国では近年、前述した急速に進む高齢化と医療費の増大を背景に、医療制度改革において、早く退院させた方が経営にメリットがある仕組みが加速している。在院日数の短縮がすすみ、2018年には入退院支援加算が新設され、入院前から、退院に向けて途切れのない支援が評価されることとなった[10]。加算の算定要件には、退院困難となる要因について評価することが含まれ、入院３日以内のスクリーニング、入院７日以内の退院支援計画書の作成が求められる。短期間での支援において、ともすれば医療者は、高齢者のできないことに焦点をあてる問題焦点型の視点になりがちである。しかしながら高齢者のストレングスに焦点をあてたアプローチは、高齢者のストレングスを信じないがための過度な介入を減じ、業務の負担軽減および経費削減につながると期待される。

以上のことから本研究では、ストレングスを持つ高齢者と出会う機会の多い退院支援看護師を対象とし、退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングスを明らかにすることを目的とする。本研究により、高齢者のストレングスに焦点を当てた介入の示唆が得られると考える。

本研究におけるストレングスの定義

ストレングスは、力、強さと和訳されることが多く、辞書[11] では「強いこと、頼んで力とするもの、頼りになる点」と説明されている。

ストレングスモデルを提唱した Rapp[7] は、ストレングスはすべての人が有していると説明し、熱望と能力と自信という「個人のストレングス」と、資源、社会関係、機会という「環境のストレングス」があると説明している。佐久川[5] も、ストレングスの構成要素には個人だけでなく周りの環境が含まれると述べている。

また、特質や特性といった人が生来持っているストレングスと、知識や知恵、才能、スキルといった、獲得し、発達させてきたストレングスがあると言われている[12, 13]。そしてストレングスは、人が成長、発達していくことを可能にする力、プラスに変化させていく力であることが、複数の先行研究[12, 14, 15]、で説明されている。高齢者の場合は、現状を維持する力や、避けられないマイナスな変化に対応する力も、対象者をプラスに変化させていく力に含まれると考えると、高齢者にとっての「プラスに変化させていく力」とは、「自身が望む未来に近づくための力」と換言できる。

そこで、本研究におけるストレングスの定義は「本人や周りの環境がもつ、自身が望む未来に近づくための力」とする。

特に高齢者においては、今後の自分の人生を、自分自身のこととして考え、すべて自分でできなくて

も、譲れないものや、妥協するもの、ゆだねる相手を自己決定するなど、自分が納得できる人生を生ききるための高齢者個人の力と、それを支える環境の力であると考える。

Ⅱ．研究方法

1．研究対象

退院支援に力を入れ、一定の事例数をもつ施設が望ましいと考え、対象はA県内の入院退院支援加算1を取得している一般病床数200床以上の病院に勤務する、退院支援看護師とした。管理者より紹介を受け、研究協力に同意が得られた15名を対象とした。

調査期間は2019年11月～12月であった。

2．調査内容

退院支援看護師の基本属性として、年代、性別、看護師経験年数、退院支援看護師経験年数を尋ねた。ストレングについて本研究における定義を説明したうえで、患者が自身のストレングスを発揮し自宅へ退院した高齢者の事例と、自宅へ退院した高齢者に共通するストレングスを尋ねた。

調査は半構造化面接とし、許可を得たうえで内容をICレコーダーに録音した。面接は対象者が所属する施設の個室で行った。面接時間は一人約30分～60分であった。

3．分析方法

インタビューデータを逐語録に起こして精読し、高齢者のストレングスの内容を示していると思われる記述を抽出した。1つのコードに1つのストレングスが示されるようコードを作成し、コードの意味、内容の類似性に基づき、サブカテゴリーに集約した。さらにカテゴリー、コアカテゴリーと抽象度を高めた。研究者で協議を重ねることにより信頼性を高めた。

4．倫理的配慮

調査の前に、本研究の趣旨・調査方法・倫理的配慮について文書と口頭で説明し、同意書への署名をもって同意を確認した。この時に同意撤回書も合わせて渡し、面接後であっても同意の撤回が可能であることを説明した。

本研究は岡山県立大学倫理員会の承認を得て実施した。(2019年7月30日受付番号19-27)

Ⅲ．結果

1．対象者の属性

対象者の属性を表1に示す。対象者15名全員が女性であった。年代は30代が4名（27％）、40代が8名（53％）、50代が3名（20％）であった。看護師経験年数の平均は18.7（SD ± 7.11）年、退院支援看護師経験年数の平均は2.8(SD ± 1.75）年であった。

表1．対象者の属性

n=15

性別	女性	15（ 100 ）
	男性	0（ 0 ）
年代	30代	4（ 27 ）
	40代	8（ 53 ）
	50代	3（ 20 ）
看護師経験年数		
	平均±SD	18.7±7.11
	中央値	18.0
	範囲	6－31
退院支援看護師経験年数		
	平均±SD	2.8±1.75
	中央値	2.0
	範囲	0.6－7

（ ）はnに対する％

2．退院支援看護師の認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス

15名の対象者の語りから、462のコードが抽出され、125の2次コード、35のサブカテゴリー、14のカテゴリー、5のコアカテゴリーが抽出された。結果を表2に示す。文中ではコアカテゴリーを【 】、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉で表記する。

【志向】は、〈帰ってやりたいことがある〉〈自由な生活がしたい〉〈入院前の生活を続けたい〉〈家に帰りたいと強く願う〉で構成される《希望》と、〈生きる心構えがある〉〈生き方を深く考えている〉で構成される《生への態度》、〈生きる支えがある〉〈充実感を持っている〉〈居場所がある〉〈役割がある〉で構成される《よりどころ》の3カテゴリーであった。【志向】は、方向性が定まっており、心がその方向を目指すことである。

【自信】は〈できると思える〉〈見通しを持っている〉〈プラス思考をもつ〉のサブカテゴリーからなる

《自信》の１カテゴリーであった。【自信】は、自分で自分の能力や価値を信じることである。

【靭性】は〈意志を貫く〉〈たくましさがある〉で構成される《堅固性》と、〈かわることを受け入れる〉と〈切り替えができる〉で構成される《柔軟性》の２カテゴリーからなった。【靭性】は強さとしなやかさをもち、外力によって壊されにくいことを意味する。

【能力】は４つのカテゴリーで構成されていた。〈身体認知機能が保たれている〉〈自身の状況を理解している〉からなる《身体認知機能》と、〈他者との関係を築ける〉〈良好な関係性が続いている〉からなる《コミュニケーション能力》、〈健康管理ができる〉〈問題に対処できる〉〈経験を活かせる〉からなる《対処能力》と、〈決めることができる〉〈意思を表現できる〉からなる《意思決定能力》の４つであった。【能力】は、後天的に備わった、行為を行うのに必要な力であり、物事を成し遂げる力である。

【環境・資源】は４つのカテゴリーで構成されていた.〈友人や地域の人の支えがある〉〈家族の支えがある〉〈医療介護職者の支えがある〉〈家族側の準備ができている〉〈家族に心構えがある〉からなる《人的資源》と、〈利用可能な公的サービスがある〉の《社会的資源》、〈環境が整っている〉〈支障が少ない〉からなる《物理的な環境》と、〈重い経済的負担がない〉の《経済的資源》の４つであった。【資源・環境】は、生活に影響を与ええる、自身の周囲の人や物やシステムなど、利用可能なもののことである。

表２．退院支援看護師が認識する自宅へ退院した高齢者のストレングス

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的な2次コード（コード数）
志向	希望	帰ってやりたいことがある	家に帰って気がかりを解消したい / 家に限られる嗜好品がある (他7)
		自由な生活がしたい	自分が思うように生活をしたい / 自由な生活がしたい
		入院前の生活を続けたい	入院前の何気ない日常を過ごしたい / 愛着のある地域に帰りたい (他2)
		家に帰りたいと強く思う	家に帰りたいという意思をもつ / 家に帰りたいという意思が強い
	生への態度	生ききる心構えがある	自分の余命を知り覚悟ができている / 生きることを諦めていない
		生き方を深く考えている	どのように生きたいか考えている / 生き方が確立されている (他1)
	よりどころ	生きる支えがある	活力の源がある / 生きがいがある
		充実感を持っている	人生に満足している
		居場所がある	自分の居場所がある / 社会参加している
		役割がある	役割を持っている
自信	自信	できると思える	これまで生きてきたことに対する自信がある / できるかもしれない思い (他2)
		見通しを持っている	家に帰ったらできるイメージを持っている / 生活に見通しがつく (他2)
		プラス思考をもつ	プラス思考である
靭性	堅固性	意志を貫く	周囲に変化をもたらすほどの頑固さ / 納得いかないことにこだわる (他1)
		たくましさがある	負けん気が強い/自分のことは自分でしたい / リハビリの努力をする (他4)
	柔軟性	かわることを受け入れる	提案を受け入れる/状況に適応できる / 変化し成長し続ける (他3)
		切り替えができる	限界を感じた時には方向性をかえる (他1)
能力	身体認知機能	身体認知機能が保たれている	必要なADLが保たれている / 認知機能が保たれている (他2)
		自身の状況を理解している	自身の能力を理解している / 自身の病名を知っている (他2)
	コミュニケーション能力	他者との関係を築ける	他者への思いやりを持つ / 医療介護スタッフと良好な関係が築ける (他2)
		良好な関係性が続いている	これまでの関係性に基づく現在の関係性 (他3)
	対処能力	健康管理ができる	医療処置の手技を習得している / 疾患の自己管理ができる (他1)
		問題に対処できる	必要なときには支援を求めることができる / 情報収集ができる (他7)
		経験を活かせる	長年の生活の知恵や工夫 / 経験に基づく得意を活かす (他2)
	意思決定能力	決めることができる	先を見越して決定できる / 他者にゆだねる判断ができる (他4)
		意思を表現できる	意思の強さを伝えることができる / 感情を言語化できる (他1)
環境・資源	人的資源	友人や地域の人の支えがある	近所にサポートしてくれる人がいる / 頼みごとのできる友人がいる (他2)
		家族の支えがある	家族の協力体制がある / 本人の意思を尊重してくれる家族がいる (他5)
		医療介護職者の支えがある	在宅医療を支えてくれる医師がいる (他1)
		家族側の準備ができている	家族が介護技術の指導を受ける / 家族が病状を理解している (他1)
		家族に心構えがある	家族が覚悟を決める / 家族が大丈夫だと思える
	社会的資源	利用可能な公的なサービスがある	支えてくれる社会システムがある / 在宅サービスが利用できる (他1)
	物理的環境	環境が整っている	必要な物品の準備が整う / ADLに応じた環境が整う (他3)
		支障が少ない	負担となる医療処置が中止された / 勝手知ったる自宅の環境 (他1)
	経済的資源	重い経済的負担がない	生活できる経済力

Ⅳ．考察

コアカテゴリーごとに考察を述べる。

【志向】は方向性が定まっており、心がその方向を目指すことである。ストレングスを「本人や周りの環境がもつ、自身が望む未来に近づくための力」と定義した時に、【志向】は、望む未来そのものであり、望む未来に近づくための原動力であると考える。【志向】はRapp[7]が、欲望、目的、野心、希望、夢と説明する「熱望」と同じ概念であると考える。《生への態度》は意味ある人生を求めており、《よりどころ》は生きることや行動の目的となり得るからである。岩本ら[12]は、ストレングスの概念分析を行い、ストレングスの属性に「方向性」があることを明らかにしており、本研究結果の妥当性が支持される。

高齢者の望む未来が〈自由な生活がしたい〉〈入院前の生活を続けたい〉であることは、高齢者だからこその《希望》であると考える。大きな夢や変化を願う【志向】ではなく、現状維持や制約が少ないことを願う【志向】である。加齢に伴い身体機能が低下し、他者の援助が必要となる高齢者にとって、切実な願いではあるが、実現が困難な場合もある。《希望》がおびやかされる状況の中でも《よりどころ》をもち〈生ききる心構えがある〉〈生き方を深く考えている〉といった《生への態度》は、自分らしさにかかわるストレングスであると考える。

【自信】が、ストレングスを構成する要素の一つであることは、ストレングスの概念を明らかにすることを試みた複数の先行研究[5, 7, 16, 18]で説明されている。Rapp[7]は、人々がやろうとし、実際できるのに、自信がないために成されていないものがたくさんある、と述べている。そして「願望×能力×自信＝見込みと可能性」と式に示し、もしどれかの要素がゼロであれば、結果もゼロであり、可能性は全くなくなる、と説明している。今回明らかになった高齢者の《自信》は、〈できると思える〉〈見通しを持っている〉等、自信に満ちているとは言い難いが、自信がゼロでないことが、希望する未来に近づくためには重要であると考える。高齢者が今後の生活がイメージできるよう、出来ると思えるよう支援することが必要である。

【靭性】は《堅固性》と《柔軟性》のカテゴリーからなる。相反する概念ではあるが、両方をバランスよく持ち合わせることが、高齢者にとって重要であることの現れだと考える。療養の場とADLが変化していくケアサイクルの中で、確固とした自己を持ったうえで、自己の変化も含めて柔軟に対応することが求められるからである。

Lundman[16]は、ストレングスに関連する概念を整理し、ストレングスは「結びつき」「堅固性」「柔軟性」「創造性」の相互作用に基づいていることを明らかにしている。同じ人であっても状況によってストレングスが「堅固性」によって表現されることがあれば「柔軟性」に頼っていることもあり、どちらも重要で相互に関係する、と説明している。《柔軟性》は〈変わることを受け入れる〉〈切り替えができる〉など、状況に応じて変化できることを示すが、《堅固性》は単に変わらないことを示すものではないと考える。変化を恐れず、自分が望む未来に近づくたくましさや勇気は《堅固性》に含まれるからである。《堅固性》と《柔軟性》は相反する概念であるものの、互いに補完し合う概念であるともいえる。

【能力】においては、《身体認知機能》《コミュニケーション能力》《対処能力》《意思決定能力》が自宅へ退院する高齢者のストレングスとして明らかになった。Rapp[7]は、能力には技能、力量、素質、熟達、知識、手腕、才能が含まれ、この能力により現在と未来に様々な生活側面が存在し得る、と説明している。このうち《身体認知機能》は、個人差はあるが、加齢に伴い低下する能力であり、変わらず維持できる能力ではない。ケアサイクルにある高齢者にとって、【志向】や【自信】【靭性】といったストレングスの前提ともいえる基本的な能力であり、ある程度〈身体認知機能が保たれている〉ことと〈自身の状況を理解している〉ことが求められる。

一方《コミュニケーション能力》と《対処能力》は長く生きてきたこと、これまでの経験が、強みとなる。成功体験、失敗体験を含む豊富な人生経験と、知恵や知識、人との関係を良好に保つ術を高齢者は持っており、《身体認知機能》とは異なり、加齢に伴い豊かになるストレングスであると考える。

《意思決定能力》は自宅へ退院する、という行為にダイレクトに関わる能力といえる。自宅へ退院する、といった転帰先に限らず、在宅サービスの利用や、援助の程度など、自宅へ帰るには様々なことを意思決定する必要がある。それら一つひとつを意思決定していくことが難しい場合に、他者にゆだねるという判断も、高齢者の意思決定である。高齢者は

個人の能力に応じた意思決定が可能であるが、周囲がこの高齢者の意思決定能力を信じ、意思決定する機会を提供することが重要である。

意思決定のプロセスは、意思形成、意思表明、意思実現に分けられる[17]。本研究結果の〈決めることができる〉は意思形成能力、〈意思を表現できる〉は意思表明能力であると考える。しかし、本研究では意思実現にあたるサブカテゴリーは抽出されなかった。これは意思の実現が、ストレングスが発揮された後の成果にあたるためと考える。Rapp[7] のストレングスモデルは、望まれる成果を明らかにすることから始まる。望まれる成果は自分自身で設定した目標であり、達成すること、あるいは成長をめざす。本研究では、自宅へ退院した高齢者の事例を対象としており、自宅へ退院するという未来が、望まれる成果であった。ストレングスは、行動力の源となる概念であり、それだけで行動に結びつく概念ではない[18] ため、今回の研究結果に意思実現能力に関連する内容が見られなかったと考える。

【環境・資源】は、周囲の人やものやシステムなど、生活に影響を与える利用可能なもののことであり、自身が望む未来に近づくために役立ち、手助けとなるものである。この【環境・資源】は、Rapp[7] の説明する環境のストレングスといえる。Rapp は環境のストレングスには「資源」「社会関係」「機会」があると説明している。「資源」は購入によって入手される資産やサービスと説明され、本研究結果では《社会的資源》《経済的資源》と同様の概念であると考える。「社会関係」は、その人が享受する社会関係から発生する人々や利益にかかわる概念と説明され、本研究結果の《人的資源》と同様の概念であると考える。

高齢者にとって、家族、友人、地域の人といった人的資源が、これまでの自身の生き方により培った資源であることは、高齢者の特徴であると言える。《コミュニケーション能力》という個人の能力も関係するが、これまでの人生で他者と良い関係を築いてきたことが、いざという時に支えてくれる人的資源になっていると考えられた。

「機会」は満たされるのを待っている空間、空所と説明され[7]、選択肢が多いことである。本研究結果において「機会」と同じ概念のカテゴリーはなかった。本研究は自宅へ退院する高齢者の事例を対象にしており、前提として、在宅を選択する機会があったためと考える。なかには自宅に退院したい希望があるにもかかわらず、選択する機会がなく、施設入所となる高齢者がいる[19] ことを考えると、選択する「機会」があることはケアサイクルにある高齢者にとって重要なストレングスであると考える。

Ⅴ．本研究の限界と課題

本研究は、自宅へ退院した高齢者の事例を対象としたため、Rapp のいう「機会」はあることが前提で、ストレングスとしては抽出されなかったが「機会」を含めて高齢者のストレングスを考える必要がある。

今後は対象を、ケアサイクルにある高齢者に広げて、ストレングスの特徴を明らかにしていくことが課題である。

Ⅵ．結語

退院支援看護師が認識した自宅へ退院した高齢者のストレングスは【志向】【自信】【靭性】【能力】【環境・資源】の５コアカテゴリーであった。

自宅へ退院する高齢者の特徴として、現状維持や制約の少ない生活といった希望が原動力になっていること、堅固性と柔軟性の両方を合わせもつこと、これまでの自身の生き方により培った人的資源をもつこと、が明らかになった。

退院支援の際には、高齢者のストレングスに焦点を当てた情報収集、アセスメントを行い、高齢者のストレングスを発揮できるような支援を考える必要がある。

付記

本研究の調査にご協力いただきました退院支援看護師の皆さまに、心から感謝いたします。

文献

１）内閣府（2019）．平成 30 年版高齢社会白書（概要版）https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/gaiyou/30pdf_indexg.html（2020. 8. 6 確認）
２）地域包括ケア研究会（2016）．地域包括ケアシステム構築に向けた制度及びサービスのあり方に関する研究事業報告書 https://www.murc.jp/uploads/2016/05/koukai_160509_c1.pdf（2020.8.6 確認）
３）白澤政和（2009）．ストレングスモデルのケアマネジメント－いかに本人の意欲・能力・抱負を

たかめていくか－．ミネルヴァ書房.
4）片桐紗季，國枝美代子，窪田陽子 , 他（2019）．人工股関節全置換術後において転院を選択する患者の思いの検討．日本看護学会論文集 : 急性期看護，（49）: 127-130.
5）佐久川政吉，大湾明美 , 宮城重二（2010）．高齢者ケアにおけるストレングスの概念．沖縄県立看護大学紀要，（11）: 65-69.
6）ベッキー・ファースト，ローズマリー・チャピン（2000）．青木信雄，浅野仁訳（2005）高齢者・ストレングスモデルケアマネジメント _ ケアマネジャーのための研修マニュアル．筒井書房.
7）チャールズ・A・ラップ , リチャード・J・ゴスチャ（2012）．田中英樹訳（2014）ストレングスモデルーリカバリー志向の精神保健福祉サービス．第 3 版 金剛出版.
8）地域包括ケア研究会（2014）．地域包括ケアシステムを構築するための制度論等に関する調査研究事業報告書 https://www.murc.jp/uploads/2014/05/koukai_140513_c8.pdf（2020.8.6 確認）
9）長谷川敏彦（2016）．【ケアの社会政策】ケアサイクル論　21 世紀の予防・医療・介護統合ケアの基礎理論．社会保障研究，1（1）: 57-75.
10）厚生労働省（2018）．第 13 回地域医療構想に関する WG_ 平成 30 年度診療報酬改定の概要．https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000207112.pdf.（2020.8.6 確認）
11）新村出（2018）．広辞苑__第 7 版．岩波書店.
12）岩本真紀 , 藤田佐和（2013）．ストレングスの概念分析　がんサバイバーへの活用．高知女子大学看護学会誌，38（2）: 12-21.
13）Miley,K.K.&O'Melia,M. &Dubois,B（2004）．Generalist Social Work Practice: an empowering approach.　United States : Allyn and Bacpn.
14）Feeley, N.,L.N. Gottlieb（2000）．Nursing Approaches for Working With Family Strengths and Resources.　Journal of Family Nursing, 6（1）: 9-24.
15）北村隆子（2012）．対象者が持つ「強み」についての概念分析．人間看護学研究，（10）: 155-159.
16）Lundman, B., L. Alex, E. Jonsen, 他（2010）．Inner strength–a theoretical analysis of salutogenic concepts. Int J Nurs Stud, 47（2）: 251-60.
17）厚生労働省（2018）．認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援ガイドライン．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000212396.pdf（2020.8.6 確認）
18）山口真里（2009）．ソーシャルワークにおけるストレングスの特性 : 類似概念との比較をつうじて．広島国際大学医療福祉学科紀要，（5）: 65-78.
19）小楠範子（2008）．退院後の生活の場の決定に参加できない高齢者の体験．老年社会科学, 30（3）: 404-414.

Perceptions of Nurses in Charge of Discharge Planning Regarding the Strengths of Elderly Patients Discharged to Home

TOMOKO KOYABU*, AIRI HARASE**, KAORI INOUE***,
MIZUKO UENO****, MISUZU MATSUDA****, KEIKO TAKEDA****,
MEGUMI NAGOSHI***, SAKAE MIKANE***

**Doctorate Course, Graduate School of Health and Welfare science, Okayama Prefectural University*

***Graduate School of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

****Department of Nursing Science, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University*

*****Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare University*

Abstract： This study aimed to determine the strengths of elderly patients discharged to home. The participants included 15 nurses in charge of discharge planning. Semi-structured interviews were conducted to investigate their perceptions of the strengths of elderly patients in the discharge-planning process. The recorded interviews were transcribed verbatim, and the descriptions of the strengths of elderly patients were coded. Based on similarities in the coded descriptions, we identified subcategories, categories, and core categories. The strengths of elderly patients discharged to home were classified into five core categories: aspire, confidence, resilience, ability, and environment/resources. Thus, these findings suggest that nurses should collect information on and assess these particular strengths of elderly patients as well as support them in using their own strengths in the discharge-planning process.

Keywords： Elderly patients, discharge to home, strengths, discharge planning